

接続詞「そして」について

金 澤 裕 之

1. はじめに

本稿は、日本語母語話者と日本語学習者（中・上級）の両者を対象として行なったささやかな調査（アンケート）の結果を報告するものである。ただし、そうした調査を行なうことになったのには興味深い一つのきっかけがあるので、些か長くなるが、それを先に紹介することにしたい。

2. 調査の経緯

少し古いものではあるが、『日本語学』第2巻12号（1983）掲載の宮地裕「二文の順接・逆接」の中に次のような文章がある。まずそれを引用してみることにしよう（1）。

＊

小学校五年生の国語のある教科書に、こういう教材の文章がある。

文のつなぎ方

1 文をつなぐ言葉

苦しいレースを走りぬいて、三位に入ったとき、その人が、「ああ、よかった。うれしい。」と思うか、それとも、「ああ、残念。くやしいなあ。」と思うか、それは、そのときのその人の感じ方によることで、どちらの場合もあります。

・わたしは、がんばって走りぬいた。三位になった。

ということを、ある人は、

・わたしは、がんばって走りぬいた。それで、三位になった。

と言うかもしれません。また、ある人は、

・わたしは、がんばって走りぬいた。しかし、三位になった。

と言うかもしれません。どういうときに「それで」と言い、どういうときに「しかし」と言うのか、考えてみましょう。

接続詞「それで・しかし」などが、話し手のものごとに対する「感じ方」をあらわすことがあるということを考えようと言っているわけだが、つづいて二三行あとは、

「わたしは、がんばって走りぬいた。三位になった。」だけでは、三位になって「うれしい」のか、「くやしい」のか分かりません。けれども、つなぎ言葉を使うと、二つの文の関係が決まり、「わたし」の気持ちをはっきりと表すことができます。

・外は非常に寒かった。かけだしていった。

この二つの文の間に、「それで」「そこで」「だから」や、「しかし」「なのに」「けれど」など、いろいろなつなぎ言葉を入れてみましょう。そして、どういうときに「だから」と言い、どういうときに「けれど」と言うのか、考えてみましょう。

と述べて、接続詞が連文にもたらす感情的意味を考えさせている。

(中略)

二つの例文は、それぞれ、

・わたしががんばって走りぬいて三位になったコト

・外が非常に寒くて、かけだしていったコト

ということがら内容をあらわしており、ことがら内容自体には、話し手の感情的評価はふくまれていない。

・わたしは、がんばって走りぬいた。三位になった。

・外は非常に寒かった。かけだしていった。

という各二文として表現しても、その点での変化はない。ところが、

・わたしは、がんばって走りぬいた。それで／だから／そのおかげで、三位になった。

と言えば、「がんばって走りぬいた」ことが原因となって、その結果「三位になった」ということを表現する。要するところ「がんばったから三位になった」と言うのであって、自分で自分が「がんばった」ことを評価していることになる。そのため、言外に、「やれやれ、よかった」とか「ああ、よかった」「ああ、うれしい」などの感情的意味があらわれてくる。そういう意味をもたらしたものはたしかに接続詞である。

・わたしは、がんばって走りぬいた。しかし／だのに／けれど、三位になった。

たとえば、「がんばって走りぬいたのに、三位になった」というのだから、三位という結果について、「期待はずれだった」とか「予期に反することだった」「不満だ」「残念だ」とかいう感情的意味が、言外にあらわれてくる。こういう意味をもたらししたのは、やはり接続詞である。つぎの、

・外は非常に寒かった。そこで／それで／だから、かけだしていった。と言うのは、要するに「外が寒かったから、かけだしていった」と言っているのであって、「外が寒い」ことが原因で、寒さに耐えてすこしでもはやく向こうへ着くようにしようとして、かけだしていったわけである。外の寒さはきびしいので、その寒さのなかを歩いてゆくのはつらい。「ぶらぶらあるいて行くことなどできない外の寒さだから、これに耐えてはやく行き着くために、かけだしていった」と言っているのである。おもてむきの論理は、単なる原因と結果だが、やはり、外の寒さと、かけだしていくことについての話し手の意味づけの評価が、なかのほうにあると見られる。

・外は非常に寒かった。しかし／けれど／それでも、かけだしていった。と言うのは、意味はちがってくるが、いっそうはっきり話し手の意味づけの評価が読みとれる。つまり、「出かけるのがつらいような非常な外の寒さだったのに、その寒さをおして、思いきって、元気に、かけだしていった」のである。このばあいも、外の寒さと、かけだしていくことに対する話し手の意味づけの評価が、なかのほうにあると見られる。こう見られるのも、接続詞があればこそそのことで、接続詞がなければ、そうはいかない。

(後略)

*

数年前の大学院の授業で、複文に関するテキストを輪読する形で、毎回担当者を決めて発表を行っていた。その中のある時、逆接の回を担当した一人の大学院生が、上にその一部を紹介した宮地(1983)の論文を下敷きにした上で、当時受講していた十数人の院生・研究生たちに、次のようなアンケートを行なったのである(2)。

※次の()の中にどんな接続詞が入りますか。

- ① ゆうべはひどく暑かった。()、よく眠れなかった。
- ② わたしはがんばって走りぬいた。()、三位になった。
- ③ 秋が来て、もう二週間になる。()、暑い日がつづく。
- ④ 外は非常に寒かった。()、かけだしていった。

筆者も参加者の一人としてこれに答えようとしたところ、①と③については

ほとんど迷わずに回答することができたが、②と④については、先の引用文中にあったような事情でしばらくの間悩んだあげく、迷いつつ一つの回答を記入した。さて、アンケート終了後に、全体を集計してみたところ、②について興味深い反応が起こった。回答した 15 人（日本人 9：中国人 2：韓国人 2：台湾人 1：モンゴル人 1）の結果をまとめると、「そして」が第 1 位で 6 人、以下、「だから」4 人、「それで」3 人、「けれども」2 人と続いた。この第 1 位の「そして」の出現については、出題者である大学院生自身は全く予想外のことであったらしく、出題の元となった宮地（1983）にも全く言及がないとのことであった（3）。また、更に興味深い事実は、「そして」と答えたのが全て日本人であったことで、他方、逆接の「けれども」を選んだ二人はともに韓国人であった。

言うまでもなく、この②の質問については「正解」というものではなく、回答者それぞれの状況認識に合わせて、順接の語を入れようが逆接の語を選ぼうが自由なのであるが、結果として、そのどちらでもない、添加とか時間的継起を示す接続詞と言われる「そして」が日本人の半数以上から選ばれたのであった。

「けれども」を選んだ韓国人のことも含め、上記のような結果を生み出した個人個人の選択が、「たまたま」のことであったのか、或いは、回答者の国民性のようなものとある程度関わりがあることなのかどうかを調べてみたくなり、アンケート調査を実施してみることにした。

3. 調査の内容と結果

調査（アンケート）の具体的な内容をまとめた形で示すと、次の通りである。

- a. 調査期間：2005 年 1 月～6 月
- b. 調査対象：母語話者＝二つの大学に所属する大学生 計 233 名
学習者＝日本語学校生・研究生・大学生など 計 237 名（4）
国籍別（中国：128 名、韓国：71 名、その他：38 名）
- c. 調査項目：以下の通り（5）

Q：次の a～d の文の（ ）内に、最も自然だと思う接続詞を（一つ）記入して下さい。

- a) ゆうべはひどく暑かった。（ ）、よく眠れなかった。
- b) 私はがんばって走り抜いた。（ ）、三位になった。
- c) 秋が来て、もう二週間になる。（ ）、暑い日が続く。
- d) 外は非常に寒かった。（ ）、駆け出していった。

言うまでもなく、a) には順接の語が、また c) には逆接の語が、基本的に

は入るはずなので、今回注目したのはb)とd)の設問についてである。先にその結果を、表1・2に示してみることにする(6)。

表1 b)の結果

	順接	「そして」	逆接	小計	その他	合計
母語話者	101 (44.7%)	74 (32.7%)	51 (22.6%)	226 (100%)	7	233
学習者	58 (30.5%)	22 (11.6%)	110 (57.9%)	190 (100%)	47	237

表2 d)の結果

	順接	「そして」	逆接	小計	その他	合計
母語話者	114 (49.3%)	2 (0.9%)	115 (49.8%)	231 (100%)	2	233
学習者	74 (35.4%)	13 (6.2%)	122 (58.4%)	209 (100%)	28	237

また、理解の便宜のために同じ結果を「順接」「そして」「逆接」のみに限って帯グラフで示すと、次の図1・2の通りである。

図1 b)の結果

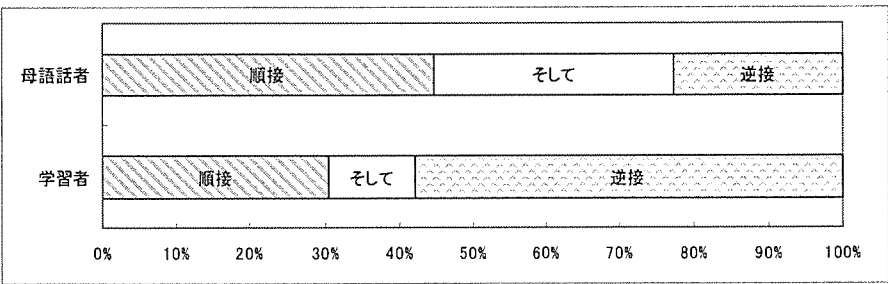
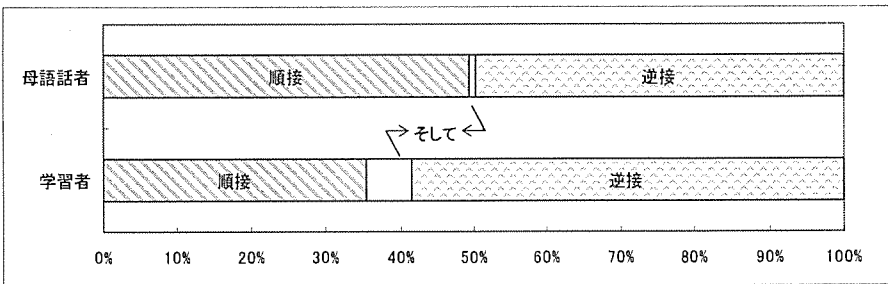


図2 d)の結果



4. 結果の分析

先に表2（図2）のd）の場合について考えてみよう。

順接の場合および逆接の場合における回答者の捉え方は、前掲宮地論文の説明の通りだと思われるが、その選択における母語話者の回答結果は、見事にその両者に二分されたと言える。200人を越える回答者の結果が、丁度と言っていいほどに同じ数になっていることは、両者の選択において全くバイアスがかかっていないということが、ほぼ証明されたと言ってよいのではないだろうか。「そして」を選んだ者が2名いるが、それ自体が誤りというわけではないので、これは例外的な選択としておきたい。

そうした母語話者の結果に対して学習者の場合は、全体的に見ると、逆接の方にある程度傾いていることと「そして」が少し多いことが目に付く。逆接への傾きについては、特に理由は考えにくいですが、国籍別に見ると、韓国では順接の方が少し多い〔57：35——順接：逆接の%、以下同様〕のに対して中国では極端に逆接の方に傾いており〔19：77〕、人数も中国の方が多きことから、全体の結果にそれが反映した模様である(7)。また、「そして」を選んだ者が6%ほどいるが、これも数値自体がさほど高いわけではなく、特に理由のようなものは考えられない。

次に表1（図1）のb）の場合について考えてみる。こちらには興味深い点が多い。

まず注目されるのは、今回の調査（アンケート）のきっかけともなった、母語話者における「そして」の多さである。空欄に「最も自然だと思う接続詞を記入」というほぼ自由な回答の設問において、全体の約三分の一が記入するということは、日本人にとってかなり“自然な”選択肢の一つであることが、ほぼ証明されたと言ってよいのではないだろうか。学習者の場合も12%近くが選択しているが、先に見たd）の場合にも6%ほどが選ばれていることを勘案すると、必ずしもこの（b）の場合に際立っているとは思えないのに対して、母語話者の場合は、d）での1%が33%に跳ね上がっているものであり、明らかに何らかの意味を持つ選択であると考えられる。この点についての分析は後に譲るとして、表1（図1）でもう一つ注目されるのは、母語話者と学習者の場合ではほぼ逆転しているように見える、順接と逆接の選択割合である。つまり、母語話者では順接の方が逆接の2倍選択されているのに対して、学習者では逆に、逆接の方が順接の凡そ2倍選択されている。学習者の場合、全体の傾向はd）の場合と似ており、特に際立つものではないが、それに対して、母語話者においてはd）の場合と比較しても、順接の方に偏るという明らかに有意な差が生じていると考えられる。

なお、アンケート調査を行なうもう一つのきっかけとなった韓国人の状況については、d) では順接の方がある程度上回っている〔57:35〕のに対して、b) ではその逆となる数値以上に逆接への極端な偏り〔23:69〕が見られた。韓国人学習者の一部へのフォローアップ・インタビューによると、韓国では、競争(競走)などにおいて「がんばる」ということは、多分に「一位を目指す」ということと同義に捉えられることが多いようで、そうした国民性あるいは民族的な意識が無意識のうちに、b) における逆接への極端な偏りに反映した可能性は十分に考えられそうである。

5. 日本語表現との関わり

前節で、質問項目 b) に対する母語話者の回答の特色として、「そして」の多さと(逆接に対する)順接の割合の高さを挙げた。ここでは、回答者のそうした反応に結びついた可能性のある日本語表現における微妙な言い回しについて考えてみたい。

まず二番目の順接の割合の高さについて考えてみるが、これと関わりが深いと思われるのが、項目の先行文にある「がんばって」と「(走り)抜いた」である。この二つのことばは、どちらも(話し手の)努力を前向きに評価してゆこうとするニュアンスを含む表現である。母語話者(日本人)の場合は、先に挙げた韓国の場合とは異なり、これらの表現が無意識のうちに重く評価されたために、「三位」という結果も前向きに捉えられて、順接の接続詞の方が多くの回答者に選ばれるという結果に結びついたのではないだろうか。言い換えれば、結果に重きが置かれやすい韓国に対して、日本では途中の経過や努力の方を重視する傾向が強いと考えられ、その分結果については、比較的「優しい」或いは「甘い」判断が下されやすいという特色が、間接的に表れているように思われる。

一方、「そして」の出現に関して注目したいのが、b) の項目の後続文の最後に見られる動詞「(三位に)なった」の存在である。日本語の言語表現におけるナル性の問題については、池上嘉彦氏の『「する」と「なる」の言語学』を筆頭に多くの言及が見られるが、筆者の研究(金澤(2003))においても、「ト」「バ」「タラ」「ナラ」といった一般に条件を表わすと言われる表現の中で、時間的継起の性格が強いと考えられる「〜と」接続文の後項においてナル的な表現との関わりが強くなることが確認され、且つこの点は、比較的レベルの高い日本語学習者の場合でもかなり習得が難しい項目であることから、日本人や日本語そのものにおけるナル的な性格の強さを示す一つの例として特徴的なものであることが分かってきた。

今回のアンケートにおいても、b)の項目の後続文の文末が「なる(なった)」で結ばれているために、先行文と後続文との関わりにおいて、順接や逆接といった、謂わば両者を有機的に結びつけてゆこうとする関係とは異なる性格を持つことばの介入が許されることとなり、特に母語話者の場合にはその代表として、両者の単なる時間的な継起関係のみを表わす「そして」が比較的高い割合で選択されるという結果に結びついたと言えるのではないだろうか。

6. おわりに

近年、さまざまな場面においてよく利用されるアンケート調査には、意識調査と実態調査という、大きく分けて二つの種類がある。言語研究の分野でも、その研究目的に沿って、このどちらかが使われることが多い。言語使用における実態や無意識の意識を探る上で、多量なデータを必要とする場合によく利用されるのが、一定の文脈中に空欄を作り、その部分に被調査者の感覚を自由に記入してもらうという、空欄補充の項目である。各種試験における自由記述問題と同様に、空欄補充の項目には調査者や出題者の意図とは異なる「意外な」回答が記されることが少なくない。それらのほとんどは無用(或いは、的外れ)なものとして無視されることが多いが、時には調査者(出題者)自身も意識していなかった、設問自体の持つ微妙な特色がそれらの回答によって逆に炙り出されることもあり得るのである。

小論で対象とした接続詞「そして」も、回答者(の一部)である日本語母語話者の持つそうした無意識の意識や微妙な感覚を反映する選択肢として、注目に値する存在になっていると言えるのではないだろうか。

【注】

- (1) なお、引用文中に出てくる国語教科書の文章(斜体で表示)は、宮地氏自身が書き下ろしの形で執筆した「文のつなぎ方」(光村図書、昭和五五年・五八年版『国語』五上)の中の一節である。
- (2) 例に使った4つの文章は、いずれも宮地(1983)の中に出てくる例である。
- (3) 因みに、質問④については、順接の回答6・逆接の回答9で、「そして」は一つも見られなかった——この点に関しては後で言及。
- (4) 学習者の日本語能力については、個々に確認することが難しかったので、正確には調べていない。ただし、質問の意味や内容が理解できるレベルということから考えて、中級及び上級の学習者がほとんどだと思われる。
- (5) ただし、学習者対象のアンケートには、適宜読み方(ルビ)を施してい

る。

(6) 表中で「その他」に分類しているのは、そのほとんどが、「やっ」と「ようやく」「思わず」といった副詞類の場合である。なお、表中のパーセント（割合）は、結果を分かり易くするために、「その他」の場合を除外して計算している。

(7) 中国の場合に、極端に逆接の方に偏っている理由は不明である。

【参考文献】

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』（大修館書店）

金澤裕之（2003）「日本語教育における「～と」接続文の位置付けについて」

（『日本學報（韓国日本學會）』第54輯

宮地 裕（1983）「二文の順接・逆接」（『日本語学』2-12）

【付記】

本稿をなすにあたり、特に日本語学習者への調査を行なう上において、以下の方々のご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

奥野由紀子、金庭久美子、黒崎誠、田代ひとみ、槌田和美、橋本直幸